
死神の懺悔

黒猫時計

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神の懺悔

【Nコード】

N3209T

【作者名】

黒猫時計

【あらすじ】

心に色があるのなら……僕の心は黒いだろう。僕、神谷隼人^{かみやはやと}は大学三年生。ある日の合コンの帰り道、信号待ちをしていると一台の車が僕の元へと突っ込んできた。遠のく意識。微かに聞こえる声に目を覚ますとそこは病院のベッドの上。意識朦朧とする中で、膝元に見えたのは死神だった。見初められ、その死神の後釜として僕は転生する。望んでなかったわけではない死神。その死神には一日のノルマがあり、決して破ってはならない掟があった。僕は死を求めて行動を決意する。しかし定められた掟を、僕は願いを叶える、ただ

その為に犯してしまう。取り返しのつかない罪への後悔の物語。

死神の見初め

暗い、暗い。混沌の中。一筋の光も差さぬ奈落の底。音もなく、風もなく、匂いもなく。

僕は一体、幾年の月日をここで過ごしただろうか——いや、体感的に長く感じるだけで、実はそれほど経ってはいないのかも知れない。し、もしかすると永年この常闇の世界にいるのかも知れない。

それは定かではないが、言える事が二つある。

まず一つは……僕はもう人間ではないこと。そして——後悔の念に押し潰されそうで、でもここで懺悔の気持ちを胸に、ノルマをまた一からクリアしていかなければならないことだ。それは絶望でもある。

細身で真っ白な身体に頭巾と一体になっている黒の衣を纏い、長大な柄の中ほどに手を添え、僕は何処とも知れぬ暗黒の世界の、ただ一点を見つめている。

そこに何があるわけでもない。むしろ何もない、何も聞こえない、何も感じられない。ただ呆然と立ち尽くし、自分の行動により招かれた結果に悔恨すると共に、長きに渡る意識的な生への鬼胎^{きたい}を抱いている。

僕——^{かみやはやし}神谷隼人は元々——人間だった。

都内某大学文化学部歴史文化学科に籍を置く三年生。身長は百七十五センチ。一度たりと染めたことのない髪は黒色で短く、光に当たると微かに茶色を映す。いたって普通の顔造形だと自分では思っているが、友人からはそれは謙虚だと言われる。

幼少の頃から世界の歴史や建造物に興味があった僕は考古学を勉強したいと思い、高校の時脇目も振らず専心努力した結果として、偏差値も倍率も高いこの大学に進学を果たす事が出来たことを、今でも誇りに思っている。

考古学とは、人類が残してきた数々の痕跡を研究し、人類の活動及びそれに伴う変化を思想し紐解き、明らかにすることを目的とした学問だ。人間の歩んできた歴史は様々な物となり形を現在に残している。

文書や美術品、考古資料として残る遺物や遺構がそれだ。死人に口なしとはよく言うが、それらの遺構や遺物は物語る。人類が歩んできた歴史を、思いと願いを刻んで。

考古学はまさに、悠久の時へ想いを馳せるロマンだと言えるだろう。

二年次までは漠然と目の前の日常を流されるままに過ごしていたが、三年生になって、周りが焦りだすと同時に、僕も就職先や将来の事などを少し真面目に考えるようになった。ちなみに成績は悪くない。悪くないといっても中の上くらい。他人からすれば悪いと言う人もいるだろうが、僕は現状に満足していた。

就職難なこの時代。有名大卒でもなかなか大手に採ってもらえない今、就職を考えるより、大学院にでも進んでもっと考古を学び、分野のエキスパートにでもなった方が将来性もあるのではないかと気楽に考えていた僕はそちらの方向で調整しようと決意を新たにしたものだ。

友達もそれなりに多く、比較的楽しいキャンパスライフを送れていたと思う。友人達との何気ない日常。馬鹿騒ぎしたり、合コンしたり、彼女と遊んだり……。

彼女がいるのに合コンしてるのか？ とよく言われるが、これは

仕方のないことだ。僕も出来れば断りたかったが、人数合わせに呼ばれたら二つ返事でOKしてしまう、そんな意志薄弱で優柔不断な人間なのだから。

そんな僕を、彼女——霧城美月はいつも笑って許してくれた。きりしろみつき
美月とは大学に入ってから知り合ったまだ浅い間柄だ。浅いと言っても一年以上の付き合いはあるが……互いにそれほど踏み込んだ関係か、と聞かれれば、そこまで深くもなく、かといって浅すぎると言うこともない。互いに両親の顔は知っているし、性交の経験も幾度となくある。が、付かず離れず、束縛し合うこともなく、気の置ける相手ではあるが置き過ぎず、気楽な間柄だと言えよう。恋人だが友達、と言った方が早いだろうか。

美月は茶色に染めた背中まで伸びるストレートの髪。を今時の女の子らしくアイロンで巻き髪にしている、不揃いな前髪から覗くくrikりの瞳は目尻を少し垂れ、穏やかな笑みを湛える口元は、それだけで安心感を覚えるような不思議な魅力を持った女性だ。

講義の時たまたま隣に相席した事がきっかけで、僕達は会話を交わすようになった。互いに似たような思想と趣味を持っていた事も、それに大きく関係しているであろうことは間違いない。容姿もさることながら、誰からも好かれるような明るく社交的な性格で、人見知りする僕には少し羨ましくも思えた。

休みは二人で骨董屋からインテリアショップへと出かけたりお茶したり、美術館巡りや図書館での調べ物。テニスコートへ赴いてはスポーツに汗を流したりした……。

なんとも奇遇なことに美月も、高校の時はテニス部だったという事実には驚いた。なにより美月は全国に行くほどの腕前で、その見た目からは——失礼な話だが、運動が得意そうにはまるで見えないにもかかわらず、インターハイで5位と言うなかなかの好成績

を修めている。

一方の僕はというと、万年補欠要因だ。高校三年間で、何かいい成績を残せるほどにテニスの腕前は成長しなかった。

美月や友人達と過ごす大学生活は楽しく、僕の日常に適度な刺激と潤いを与えてくれていた。

そんなある日、僕はまた合コンに誘われたのだ。断ろうと思いつながらも僕は、いつものように承諾してしまった。

……今になって思えば、この性格が災いし現在のこの状況を作り出したことに、僕は苛立ちを覚えると共に辟易する。

いつもなら居酒屋に集合をかける友人は、この日は珍しくカラオケにしようと言い出した。飲み放で料理も出て歌も歌えて馬鹿騒ぎ出来る、「金のない学生なら一石四鳥だろ」と友人はにやけながら言った。

あまり乗り気じゃなかったが、いくら数合わせで呼ばれているからと言って、場の楽しい雰囲気は僕一人の浮かない顔で白けさせるのも気の毒だ。ということで、僕もそれなりに気を使い、場を盛り上げることに専念した。

カラオケ合コンは思いの外盛り上がりを見せ、僕自身、その日はいつも以上に酒を飲み、大分酔っ払ってしまっていた。しかし酒の勢いに任せて——だのそういった低俗なことは特にせず、アドレスを聞かれても、彼女がいると言って全て丁重にお断りした。更に誘われた二次会も断り僕は友人や集まった女性達と別れ一人寂しく帰路につく。

そうしてばやける視界の中、交差点で信号待ちをしている時だった。深夜と言うこともあり、車も人もそれほど往来があるわけでは

なく、街の明かりも光量を落としている。

酔いが大分回って平衡感覚が鈍り、千鳥足になりながらも、電信柱に手を付きもたれ掛かったその時——。僕の三半規管に轟音が響いてきた。

僕は音の聞こえて来た方向へ何と無しに顔を向けると、僕のいる側とは反対の車線から、こちらへ猛スピードで向かってくるスポーツカーらしき物が目に付いた。エンジンを乗せ変えているんだろうか……まるでテレビで見たF1のような騒音と、急ブレーキをかけた時のような耳をつんざく様な音。そして摩擦するタイヤから煙を上げながらそれは僕に近づいてくる。

相当に酔っているため、その場から条件反射的に逃げるという思考も働かず、朦朧とする意識の中——僕は車に轢かれた。

不思議と痛みはなかった……いや、ほんの一瞬、痛みを感じたようにも思えたが、少しの浮遊感を味わった後、僕の意識はその一瞬で途切れる。

まるで海の上を漂流しているような感覚。しかし手足が水に触れているような感触はなく、ただ浮力に身を任せているような——意識だけが表層に浮かび、それが流れているような感覚だ。

力なく無意識の波に身を委ねる僕の意識を、微かに呼び戻すような声が聞こえた。それは聞きなれた声。いつも聞いている声。両親の声、美月の声、友人の声……。

それに気付き、ほんの僅かに開いた瞼から、外の世界を窺い見ると、まるで暗闇からカーテン開け放った時のような眩い光が僕の目に注ぎ込んだ。だが不思議と眩しくはなかった。

微かに見える視界を遮る黒い影。集まっている人の影が、天井の照明から照らされて出来たものだと思っていた。

母の顔、美月の顔、友の顔——切迫した場の空気感から、最後になるかも知れないことを自ずと悟った僕の二つの瞳は、無意識に彼らの顔をフォーカスしていく。

しかしそんな中、中空を漂う僕の視線が捕らえた者に、僕自身驚きと動揺を隠せなかった。声も出せない、指一本動かせない身体で、今にも途絶えそうな意識の中、僕はそれを注視した。

所々ボロボロに解れた漆黒の闇のようなローブで身を包み、目深に被った大きなフード。顔を少し上げたことで見えたその下の素顔は白骨だ。形の良さそうな頭蓋骨、歯並びはとても綺麗で、大きく窪んだ眼窩から覗く暗闇には、灯火のような、はたまたルビーの輝きのような赤い光が左右共に浮かんでいる。

肩には巨大な鎌を担いでおり、そいつは僕の膝の上から、僕の目を静かに見つめている。『死神』だ。ゲームやCG、タロットカードの図柄でしか見たことのない、死神。そいつが今、僕の目の前にいる。

時が止まった……いや、凍りつくかのような冷たい視線を浴びせられ、僕は息をすることさえも出来なくなった。

微かに聞こえる機械音——心電図の電子音のようだ——は、次第にその心拍を刻む音を緩やかなものへと変化させる。

未だ僕を見つめたままの『死神』。あまりの息苦しさで涙目になる僕を、冷笑を口元に浮かべ蔑むように直視しながら肩を震わせ——笑っているようだ。

……何がそんなに面白いんだ！人間の死様が、お前達にとってそんなに愉快なものなのか！？

僕は声にならない思念で以って、目の前で不気味な笑みを浮かべ

顎を打ち鳴らす白骨に、呪い殺さんとするほどの憎悪の感情を向ける。

しかし笑う死神はまったく気にも留めない体で、肩に鎌の柄を当て心電図の音に被せるようにコツコツと音を鳴らしながら、コントラバスのような重々しく響く声で、意識の切れそうな、今にも心停止しそうな僕に声をかけた。

『ようやく開放される。跡は頼んだぜ』

その言葉と同時に死神は鎌を振り下ろし、僕の身体を切り裂いた。だがそれは肉体的にはない。星幽体と呼ばれるものだ。

すると今まで辛うじて現世に繋ぎ止めていた僕の意識の糸はプツリと音をたてて切れ、その瞬間微かに聞こえたのは、僕の最期を知らせる心拍停止音と、泣き叫ぶ母、そして美月の声だった。

暗闇に溶けていく意識の中、頬を伝う涙の温かさが、妙に僕の頭に残っている――。

暗闇の中で

数分だろうか。いや、或いは数秒かも知れないし数年かも知れない。

微睡む意識の中、僕は夢を見ていた。

暗闇に浮かぶ白い顔。顔と言っても皮膚はなく肉もなく、それは病室のベッドの上で見たような**髑髏**だった。

カタカタと顎を打ち鳴らし、硬質な音を空間——かどうかは分からないが——闇の中に響かせながらそいつは言った。

『ノルマは五百だ。まあ頑張りな』

見た目からは想像が付かないほど人間味を帯びた口調。意識が途切れる前に、最後に聞いた声と同じ音声だった。重低音の楽器のような声。まるで小さなホール内でその演奏を聞いているかのように頭に響く音。

……ノルマ？

僕は何を言われているのか分からなかった。そして混乱する僕を余所に、頭だけを闇に浮かべた白骨は何やら説明をし出す。

『一つ、運命の寿命が近くない者は決して殺してはならない。二つ、最後の死者としか口を利いてはならない。三つ、一日に最低一人は殺さなければならない……』

殺す？——物騒な話だ……一体何の説明だろうか。僕は息を引き取って、そして死んで……。無に帰ったのではないのか？ もしくは死んだ後、天国や地獄に行くのではないのか？ もしかすると、ここが天国あるいは地獄なのだろうか？

頭の中をぐるぐると巡るのは、妙にリアリティのある夢への疑問と、目の前の髑髏の発する言葉への猜疑心だけ。

尚も目の前の骸骨頭は説明を続けているが、僕の頭はそれを拒むように思考回路を断とうとする。が、脳内に直接響くようなその声に、僕の頭は否応なしに反応を示す。

『五つ、砂時計を逆さにはならない……』

砂時計？ 一体何のことだろう——いや、そんなことより四つ目を聞き逃している。念のために聞いておいた方がいいのか、そう思えたのはいいものの口が開かない、声を発することが出来ない。

『そして六つ、ノルマは一月以内にクリアし次に回さなければならぬ』

……ノルマ……五百と言う数字はさっき聞いた。それに今の説明で殺す、死者と言う単語が出てきたな。これは一体——。

何故夢の中でまでも頭を使わなければならないのか。僕は死んだんだ。いい加減安らかに眠りたい。そう願う僕の心の声も、髑髏の声に簡単にかき消されてしまった。

『これらの掟を破る者、永久とこしえの闇に囚われん』

最後に光を失った眼窩を僕に向けた骸骨は、一瞬笑うように口元を歪めた——気がした。そして齒を鳴らしながら黒闇に包まれるようにして、その姿を完全に消す。

それと同時に、僕の意識は上から摘み上げられるかのようにして持ち上がり、僕は目を覚ました。

が、覚醒したはずの僕の脳が認識した眼から受け取った風景は、先ほどの夢と同様、暗黒色をしている。カラーなんて何もない。モ

ノクロだったならまだしも、完全なる闇。混沌だった。

夢から覚めたのか、まだ夢の中なのか。その境界は曖昧なままだ。それにしてもギリシャ神話の力オスは、こういった場所に住んでいるのである。耳が痛くなりそうなほどの静寂に包まれたここは、まさに“らしい”場所と言える。

普通の暗闇なら目が慣れるといったこともあるが、どういうわけか一向に目が慣れる気配すらない。時間の感覚と言うものは生きていた時に、なんとなくだが漠然と感じられたものだ。それは生の実感と言ってもいい。しかしこの場所——どこだかは知らないが、時を肌で感じる感覚すら起こらない。

呆然とどことも知れぬ空間のただ一点を見つめ、思慮を巡らす僕の右手に、突然何かを握り締めている感覚が生まれたことに気付く。それは直径五センチ程の棒のような物で、手を上下にスライドさせると、その長さが意外に長いことが分かった。そして更に、僕が何かを纏っているであろう事を認識させる衣擦れの音——。

僕は空いている左手で、自分の身体に触れてみた。

——ッ！？——

いつものように触れ、でもいつもとは違う感触が手から伝わってくると、僕は愕然とし思考が止まる。

肉が、ない。普通に触れるとそこにあるはずの、肌が、皮膚がないのだ。視認しようにもこんな暗闇では自分の身体すら確認できない。

僕は左手で至る所に触れてみた。腕、脚、腰、胸。その過程の中で分かった事が一つ、僕が着ているのはどうやらローブのようだ。長く大きな一枚布を、まるで民族衣装であるポンチヨのように上から被っているらしい。頭にはパーカーのような感触もある。

そうして確かめようと僕が頭に手を伸ばしたその時——カチッ。という音が耳をつく。左手が当たったのは、顔だ。

僕は思わず目を睜^{みは}つた。触れた手に肌の温もりは感じない。それどころか硬質な……まるで骨と骨を打ち鳴らすような音が空間に響く。

頬を摩る手は、普通なら頬肉の触感を脳に伝えるだろうが、僕が知覚した事実はまるで違った。頬から下へ滑らす手。感じたのは、異様に出っ張った頬骨とその下の顎。そして、直に触れた歯列だった。

僕は息を呑んだ。その音でさえも煩いくらいに耳に響く。

いや、耳に聞こえてはいるが、耳自体はもうないのだろう。どうやら僕は、白骨と化しているらしい。見えるわけではないから確実なことは言えないが……状況証拠からしてそう言うことだ。

すると、ふと脳裏に過ぎつた、最期に出会った死神の言葉。『ようやく開放される。跡は頼んだぜ』

もしかすると、僕はあの死神の後釜として選ばれ、転生してしまったのか？　そして、ノルマ五百という数字。一日に最低一人。一月以内という言葉。

……冗談じゃない！　何で僕なんだ！　こんなわけの分からない所に閉じ込められて、これから人の命を奪えだど？　そんなこと出来るはずがない。

叫んでも叫んでも、自分の声が反響するだけ。音という音は、自分以外からは何も聞こえない。

死してなお絶望しなければならぬ状況に気が狂いそうになりながらも、僕は少し事の整理をしようと、自らを落ち着けようと腰を下ろすことにした。両手を後ろに付き足を投げ出して座ろうとしたが、どういつ訳か右手に握られた棒は手に吸い付くようにして離れない。手を離そうとしてみるものの、やはり無理のようだ。

仕方なく胡坐をかき、棒を肩と床（とりあえず足が接地していた面）の二点で支えるようにして置き、足に左手を添える。だがやはり肉の感触はない。摩ってみても、肉の上から触れられていた硬い骨の感触しか伝わってこない。

僕は……死神となったのか。死神に見初められ、生命の営みを絶たれ、目標も夢も追うこと叶わないまま……。

僕はさっきの『掟』をもう一度頭の中で反芻してみる。

一つ、運命さだめの寿命が近くない者は決して殺してはならない。

二つ、最後の死者としか口を利いてはならない。

三つ、一日に最低一人は殺さなければならぬ。

四つ……ここは聞き逃したために分からない。講義の時は、講師の話聞き逃しても友達や美月がノートをとっている為、後から見せてもらえるが……ここにはそんな人間誰もいない。……思いつくものとしたら……そうだな、殺す人数の制限、だろうか？

五つ、砂時計を逆さにしてはならない。

六つ、ノルマは一月以内にクリアし次に回さなければならぬ。

これらから推測するに……まあ憶測の域は出ないが。導き出される答えとして、『死神は、その死神が最期に殺した（つまりはノルマを達成した時の）人物を後釜とし、何代にも渡ってサイクルを繰り返している』と言うことか。

それにしても、運命の寿命と砂時計。これらが気に掛かる。そして最後、あの髑髏が口にした『掟を破る者、永久とこしえの闇に囚われん』と言う言葉。

……掟を破ったらどうなるんだ？ 永久に闇に囚われる？ もしかして、ずっとこんなところに閉じ込められたまま、僕は死ぬことすら出来ないのか……。馬鹿馬鹿しい。

僕は怒りを通り越して呆れ返った。自分が望んでこうなった訳じゃない。無理やり転生させられて、拳句掟を破ったらどうか、勝

手に決め付けるな。

掟を守ると言うことは、人の命を奪うということだ。良心と理性のある人間にはそんなことは出来ない。れっきとした犯罪ではないか。

僕は掟のことはひとまず忘れ、立ち上がり、出口を探すことにした。ここがどれだけ広いのかは分からない。しかし、じっとしていても何も始まらない。

意気込み一歩踏み出す足は、まるで雨上がりの土壌のように柔らかく、スポンジを踏んで歩くかのように床に沈み込み、ゆっくりと跳ね返す。

そんな不安定なものの上を素足で歩く、その感触の気持ち悪さに歩くことも躊躇われるが、出口を探すためだ、仕方がない。

しかし歩けど歩けど、一向に出口など見当たらず……。それどころか、歩き出した位置から一步も前へ進んでいないように思えた。僕はそのことに気付くと、一気に倦怠感が体中を駆け巡る。歩くことすら億劫になった。立ち止まり、僕は左手で頭を押さえ頭を振った。

そのまま倒れるようにして仰向けに寝転がると、闇の暗幕を見上げながら僕は小さく笑声を漏らす。

闇の中に乾いた声が響く。

とてつもなく馬鹿げ理不尽な状況に、僕はただ、声を上げて笑うことしか出来なかった――。

決意

たった一人しかない空間で、僕はしばらくの間自身が置かれている境遇に、そして自分に対して嘲笑していた……。

笑うことに飽き、ただ無心で何も無い、何も見えない天を見上げるようになってから、一体何分経過しただろう。

一分？ いや、それは無い。最低でも五分くらいは経過しているだろう。……五分。

何もない空間。何も聞こえず、何も見えず。自分の身体すら視認出来ない闇の中に置かれると、こうも時間が長く感じられるものなのか。こんな状況下で、僕の精神はいつまで持つだろう……。

静寂。目に見える寂しさ。音で感じる静けさ。それらを纏めて心の隙間に無理やり捻じ込まれるような、そんな息苦しさが次第に僕を襲う。

肺は存在しないはずなのに、まるで打ち揚げられた魚のように口を開閉し、僕は空気を求めて身を悶えた。

あまりの緊張からか、それとも恐怖からなのか。定かではないが、落ち着かせようと深呼吸を繰り返した結果、呼吸は正常に行えるまでは回復した。しかし、心臓の無いはずの胸の奥が、脈動するのをより強く感じるようになった。鼓膜に響くような鼓動音。その速さから、心拍数は百を超えていそうだ。

……煩い。それが正直な感想だった。生きていた時は、これほどの心音は普通感じられない。今は骨振動とでも言っただろうか、全身骨となった身体を心音がくまなく伝うような感覚だ。

何をするわけでもなく、僕は再び胡坐をかいて座った。右手に握

られている棒が少し重たく感じられたのは気のせいだろうか？

僕は空いた左手の掌を見つめる。見つめると言っても見えないのだが……。歩いてても出口が見つからない。何もすることがない、何も出来ない。そんな状況下ですることといったら、手に刻まれた指紋を見つめることくらいだ。

それは生前の僕の癖だった——と言っても、こんな闇の中ではそんなことすら意味をなさず、虚しく映るだろう。

……映る？ 何にだ？

そんな自問自答を繰り返すだけの無価値な時間が延々と続く……。

それから数時間は経過しただろうか。もし、一時間も経っていないと言われたら発狂しそうなほどに、僕の場合は闇に蝕まれつつある。

それに、無為に過ごす時間の経過とともに——神経の通った肌は存在しないが——心なしに肌寒く感じられるようになってきていた。

末端が徐々に冷えてきて、鳥肌のような感覚が全身を巡る。

掟破り……一日以内……最低一人。このまま人を殺さないでいたら、僕はどうなるのだろうか。この寒さはどこまで進行し……といっても、精神が先にやられそうだが。

時計でもあれば時刻の確認など容易いのに……不親切な空間だ。

一日以内だと制限時間を設けておきながら、時刻も分らないのでは……掟破りだと非難出来ないだろうに。

……もしかしたら、この感覚がタイムリミットが迫っていることを意味しているのか？

先ほどは指先足先だけだった身体の冷えは、時間が経つにつれ、徐々に手首の辺りまで進んできている。

僕は言い知れぬ不安感と恐怖に襲われた。このまま放っておいたらどうなるのか。この冷感に包まれたまま僕は永久に閉じ込められるのか？ 本当の死すら迎えられないまま……。

もしノルマの五百を達成したらどうなるのだろうか。ここから出られて、死ぬことが出来るのだろうか？

その時思い出された死神の顔と声。『ようやく開放される――』

僕は目を瞠った。もしかしてクリアすればここから出て、安寧の死へ、無へと回帰出来るのではないか？

しかし同時に葛藤が生まれる。僕は理性も道德も持ち合わせている人間だ。今は違うが、人としての心までは捨てることは出来ない。死への希望と罪への背徳感。二つの反する思いが胸中を渦巻く。

人を殺めるか否か……。ただ一つの論題に、僕は時間も忘れ真剣に思慮を巡らした。

鼓動が頭の中まで響く。ハッとして気付いた時、寒気は既に両腕と両脚を包み込んでいた。残す部位は胴と腰、そして頭だ。

こんなに真剣に頭を悩ませたのはいつ振りだろうか……。頭から冷えてくれれば、少しはまともに考えが纏まったかもしれないのに。何から何まで不親切な空間に、僕は嘆息する。

身体の芯に向かって徐々に進行する、凍える寒さに身を震わせながら歯をカタカタと鳴らす。それは恐怖からでもあつたろう……。永久の縛りに対しての恐怖心と戦うには、僕の心はあまりにも脆く、そして……蝕まれすぎていた。

いつからだろう、精神を病みだしたのは。冷たさを感じた時からだろうか。いや、もしかするとここへ来た時からもう、既に病んでいたのかもしれない。

そして、僕は夢の中で説明を受けている時から、既にこうなるこ

とを理解し、自身の理性に許可をし——最初から……決めていたのかもしれない。

『心に色があるのなら……僕の心はもう黒いだろう。白はどこにもなく、在って灰色で黒に最も近い灰』

決断してしまうと気が楽で……。早鐘を打っていた僕の鼓動は今はすっかりと落ち着きを取り戻し、頭の中も妙にスツキリとしていた。

人を殺す……。死神と言えば、あの特徴的で象徴的でもある大鎌だろう。それでどう殺すのだろうか？ 肉を裂くのか？ でも僕は切り裂かれた感じはしなかった。それに掟もあるし……。

気にはなるがそれより、僕の右手から離れないこの棒のような感触。もしかしたら、この柄の先に鎌が取り付けられているのかもしれない。残念ながら暗闇のせいで見ることも叶わないが、僕は死ぬ前に一度目になっている。

綺麗な曲線を描く長大な刃渡りの刃が付けられた、木で出来たポール。臃げながらに全様を覚えている。

だが、決意を固めたのはいいが、ここから出る手段が分からない。刻一刻とタイムリミットは近付きつつある。もう既に腰は冷え切り、まるで極寒の中、川へと這入るような感覚だ。

……寒すぎる。

ここから出るにはどうしたらいい？ 最初の説明では出方なんか教えてはくれなかった。本当に何から何まで不親切。僕は少しずつ苛立ち始め、自然に鎌の柄頭を何度も床に叩きつける。

考え、叫び、そして左手で天を仰ぐ。だが闇からは抜け出せない。焦りともどかしさから僕の怒りはついに最高潮となり、左手を柄に添えると、激昂して思いっきりそれを袈裟に振り下ろした。

すると突如、闇色の空間に亀裂が入る。それは地割れのような形をして、微かだが白い光が漏れてくる。

死んでからは決して見ることもない光。ここへ来てからも、光を拝めるなんてことは毛ほども思いもしなかった。

久しぶりに見た——— 実際死んでからは一日も経っていないのだろう——— その光は、僕の眼窩に直接注ぎ込む。目の奥が熱い。僕はどうかやら泣いているようだ。

涙が伝う感覚はない。だが、胸の奥に感じる窮屈な締め付け感、間違いなく泣いている時のものだと思えた。

僕は懐かしむように光へと手を伸ばす。刹那、眩いフラッシュがたかれたと思った次の瞬間、僕の表層意識が削り取られるかのよう意識は混濁し、無意識と言ふ名の海の中へと沈み込んでいった。

漂流する感覚。それは思ったほど長くはなかった。

僕は微睡みから覚めようと瞼を開ける。さっきの光よりも更に眩しい光が、一気に僕の眼窩に注がれた。あれだけ暗闇の中にいたんだ、光に目が眩んでも仕方のないことだろう。

僕は再び目を閉じ、光を遮るように左手で目を覆い、ゆつくりと光に目を慣れさせながら視界を広げた。

一分ほどは掛かったが、大分光にも慣れた僕は頃合を見計らい、ゆつくりと目を覆う左手を退けた。

すると視界に映る光景は、僕が想像していたものとはまるで違い、落胆と驚愕という複雑な色を隠せない。

一面が白と黒で構成された世界。いわゆるモノクロ、モノトーンと言うやつだ。家具や雰囲気というところシックな感じ。

一面カラーを想像していた僕は、呆然としてその場に立ち尽くす。しかし直ぐに気づいたことがある。闇から抜け出てきたこの場所に見覚えがあったのだ。

……そう。僕が車に轢かれた、あの交差点だった。しかも僕が最後に立っていた、もたれ掛かっていた電柱に視線を向けると――

そこには、まだ生きていた時の自分の姿が……今にも吐きそうな程、気持ち悪そうに胸を擦る僕自身が立っていたのだ。

僕は開いた口が塞がらない。顎関節がコキコキと音をたてる。すると突如、背後から聞き覚えのあるエンジン音が、僕の空っぽの頭の中に響いた。僕は音に驚き振り返る。

ぼやける視界の中、最後に見た赤いスポーツカー。蛇行しながら反対車線を逆走する形で走行している。僕の目のない眼窩が、まだ離れた運転手の顔を鮮明に捉えた。

二十代後半くらいだろうか。ちやらちやらした感じの茶髪の男は、へらへらした笑みを口元に浮かべながらハンドルを握っている。顔は赤らみ、目は虚ろ。

見た感じ、明らかに飲酒運転のようだった。そいつはまだ気づかないのか、変わらぬスピードで、電信柱にもたれる僕の方へと猛スピードで突っ込んでいく。生きている僕はその様子を呆然と見つめていた。

その瞬間を今でも僕は覚えている。そして僕はハツとして駆け出し声を上げた。

「……危ないっ!」

僕の言葉も虚しく、結果、スポーツカーは僕を轢いた。体験した事実が目の前で起こった。僕は夢でも見ているのだろうか？ 今でも思い出す急ブレーキの音、そして今、初めて聞いた金属音を孕んだ鈍い音。

轢かれた僕の身体は電信柱と、^{ひしゃ}拉げた車のボンネットとバンパー

に押しつぶされているようだった。足がおかしな曲がり方をし、上半身はひびの入ったフロントガラスに体重を預けるようにして倒れていた。体中から血を流して瀕死の状態の僕。

自分の事故映像を目の当たりにし、僕は急に吐き気を催す。五臓六腑が全て出てきそうなほどの不快感。戻す物など何もない体のはずなのに……。僕は左手で口を覆いながら肩で大きく息をし、とりあえず自分を落ち着かせる。事の成り行きを見守ろうと、視線を電柱に戻した次の瞬間――。

再び眩いフラッシュとともに、いきなり場面が転換された。

初仕事

モノクロの景色が歪み、それがうねりながら元に戻る。

僕は船酔いの感覚を思い出した。揺られ、平衡感覚のない中で吐き気を催す。船の縁に身体を預けながら嘔吐^{えず}く感じ。

似たような酔いの感覚に気分が悪くなりながらも、僕は手にした鎌をしっかりと握り締め、その場で立ち続けた。

うねり歪んでいた景色はやがてもとに戻る。一度深く呼吸をした僕は顔を上げ、場所の確認をした。

相変わらず白黒の風景だが、ここはどうやら病室であることが分かる。僕の立つている窓際の位置からは、五ヶ所にカーテンで覆われたスペースが確認できたことから、広さは六床室だと分かった。

窓の外へ視線を向けると、暗い街の風景の中に、所々街灯らしき白い色が混じっている。しばらくの間、僕は夜の闇色が大半を占める外の景色を眺めていたが、ふと目の焦点が窓ガラスに合うと、改めて自分に起こった事態を認識する。

後ろから淡い逆光に照らされて、窓に映る僕の顔は人のそれではない。

ゲームで言うところの骸骨の戦士、スケルトン。タロットカードで言うならば、まさに真正正銘の死神だ。

鎌を携えた黒衣に包まれた身体。闇の中にいた時は見えなかった全容が明らかとなった。フード付きのローブのようなものを頭からすっぽりと被り、フードが包む頭は真っ白の髑髏^{むくろ}。

長大な鎌の柄を握り締める手は、昔理科室で見た人骨模型に似たような、いくつもの関節が組み合わされた骨格だった。

しかしおかしい感覚だ。僕はこの死神の目のない眼窩、脳の無い頭で、皮膚の無い肌で、様々なものを感じることが出来る。

あたかも生きていた時のように、だ。分かりやすく例えるならば、死神の着ぐるみを着た生身の僕が、中から外を眺めているような感覚。

全ての五感が生きていた時と同様、正常に機能している。僕は不思議で仕方が無い。

ガラスに映った自分を見つめ、戸惑いながらも納得し、再び外へ視線を移した、その時――。

「あゝ、マジ最悪だわ」

僕の耳に男の声が聞こえてきた。それは僕の左――つまりは病室再奥の窓際に覆われたカーテンの一つ――から聞こえてきた。

男は時折相づちを打ちながら、ベッドを叩いては自分の状況を誰かに話しているようだった。その声のトーンから、怒りと呆れ、後悔のようなものが感じ取れた。

しかしはた迷惑な奴だ。ここは病室、しかも深夜だぞ。周りにはほかの入院患者もいるだろう。電話なんか明日でも出来るだろうが。

僕はカーテン越しから聞こえる非常識男の顔でも拝んでやろうと、カーテンに手を伸ばした。しかし僕の手はカーテンに触れることなくすり抜ける。まるで霞に手を入れたかのように。

これなら壁抜けなんかも難なく出来そうだな。どうせ僕の存在は人には見えないんだ。

僕は構わずカーテンをすり抜け中に踏み入る。ギプスをはめた足を吊り、青い病衣に身を包んだ男。携帯を片手に笑みを浮かべながら、電話の向こうの相手と会話を交わす男。頭部に包帯を巻き、い

かにも軽そうで頭の悪そうな顔をしている、チャラそうな茶髪の男。

僕はこの男に見覚えがあった。見覚えといっても、つい先刻見た、あの赤いスポーツカーの運転手だ。

僕を轢き殺した張本人。大した怪我もなく、笑みを浮かべ話せるほどの軽傷患者。僕はふつつと自然と怒りが込み上げてきた。醜い負の感情が、僕の胸の奥で鎌首をもたげる。

「ん？ ああ、轢いた奴？ もう死んだんじゃない？ 知らねえけど、ギヤハハッ！」

轢いた奴……。そうか、僕のことだな。お前が轢き殺したのは、間違いない僕だよ。

悲しさからか、怒りからかは分からない。だがはつきりと分かる。僕の心が、泣いている。

僕はノルマ達成への第一歩、最初に殺す人間を、僕の目の前で馬鹿笑いをする、僕の命を奪った男に決めた。

すると目の奥が急激に熱くなるのを感じるとともに、男の心臓付近に砂時計のような物が出現し確認できた。三本の柱に囲まれるようにして取り付けられた、瓢箪ひょうたんのような形をしたガラスの中に、まるで血の色のように真っ赤な砂が入れている。

砂時計。……たしか掟にもあったな。『五つ、砂時計を逆さにしてはならない』

男の砂時計は上から下へ、さらさらと静かに砂が流れ落ちる。上部に残る砂は、まだ半分近くあるようだ……。『……』

もしかすると、これが人間の寿命なのか？ しかし運命さだめの寿命とは一体……。『……』

この砂時計を逆さにすること……。それは寿命を延ばす、ということになるのだろうか？ 運命というのが少し気がかりだ。

だが、思慮する間も頭に響く男の声が、僕に冷静な判断を下させない。怒りは込み上げるばかりで、僕は醜い感情のままに、このまま男を殺してしまいそうだった。

自分でも分かる。いま僕は、今までしたことのないほど冷たい視線を、目の前にいる男に注いでいることを。

すると視線を感じたのか、男はギョツとして僕を見上げた。しかしどうも様子がおかしい。

白黒の風景の中で唯一のカラー人間。その男は未だに電話に夢中だ。しかし、男と重なるようにして存在するもう一つの身体？ 薄い緑色をした希薄な発光体のような身体の男は、僕を見て目を見開いている。

僕はベッドに上り、男の膝元に立つ。しかし、やはり彩色のある男は僕の姿が見えないようで、苛つくほどのにやけ面で電話の相手と会話を続けている。

だが発光体の男は僕の存在に気づいているようで、この世のものとは思えない物を見た、そんな時のような驚愕の表情に恐怖の色を浮かべながら、僕から目を離せないでいる。

そして気づいたことに、その発光体の男の胸元にも、同じように砂時計が見て取れた。

僕は二つの砂時計を注視し見比べてみる。すると砂の量が、発光体の方が彩色体に比べ少ないことが分かった。量としてはごく僅か。実際の砂時計にすると20秒ほどしか残っていないように見える。

これが死神が言っていた掟の、『運命の寿命』という奴か？
だとするならば、この男の運命の時は近いということになる。そして同時に、僕が殺してもいい人間……。

僕は心が打ち震えるのを感じた。自分を殺した人間を殺せる。こ

んなに嬉しい事が、生きていた時に一度でも感じられただろうか。
僕は口端を上げてほくそ笑む。死神としての顔は変化がないだろうが。

雰囲気を感じたのだろうか、緑の希薄な男は僕を見るなり恐怖に顔を引きつらせ、ぶるぶると震えだす。

ははっ……………いい気味だ。もっと恐怖に顔を歪めてくれ。お前の運命の時は、もう直ぐそこまで迫っているのだから。

僕は今一度、カラーに映る男に焦点を合わせる。相も変わらず電話に夢中だ。大口を開け、人の迷惑も考えずに馬鹿笑いを上げる声……………。いい加減耳障りだな。

（ふふっ……………。今から、殺してやる。僕の命を奪った犯人。人の命を奪った者は……………のうのと生きてちゃいけないだよ。分かるか？……………言っても聞こえないか。声は発していないのだから）

信じられないほどのすの利いた声を心の中で発し、僕は視線を発光体に移す。すると、微かだがそいつの口から声が漏れるのが聞こえた。

『許してくれ』

空耳かとも思ったが、どうやらそうではないらしい。涙を流しながら必死の形相で僕に懇願してくる。本物の命乞い……………。

僕は笑いが止まらなかった。口から漏れ出るのは冷たい吐息。煙のように噴き出では、更なる恐怖を演出する。まるでホラー映画のようだ。それもB級の……………。

しかし収穫だった。彩色体の人間は僕が存在を感知できないが、

層のように重なる発光体には、僕の姿が認識できることがこれであったのだから。

ただの役立たずで終わらなくて、よかったな。

男にそう心で話しかけ、僕は手にした大鎌の柄を両手で持つ。少しでも長く恐怖を味わえるよう、僕はゆっくりと、まるでスロー再生をしているかのようなゆっくりとしたモーションで鎌を振り上げると、刃が頭上に来たところで動きを止めた。

柄を持つ手に力が入る。見下ろす男は、一方は笑いこけ、もう片方は首を振りこの場から逃げ出したそうな苦悶の表情を浮かべている。

僕は死ぬ時、どんな顔をしていただろうか。笑っていたか？ 苦しんでいたか？ この男のような顔をしていたのかもしれないな。

『助けてくれ』

必死に許しを乞う男。もう聞き飽きたその声を断ち切らんと、僕は鎌を――振り下ろした。

白刃はちょうど袈裟掛けに弧を描いて男に伸びていく。滑らかな曲線が鎌の刃に軌跡となり追従し、男の発光体の左肩口から骨盤までを一気に切り裂いた。

発光体は最期、耳を劈くような断末魔の叫びを上げながら血飛沫を撒き散らす。それと同時に緑色の砂時計も破壊され、それらは時間の経過とともに、何事もなかったかのように消え去った。

大鎌を肩に担ぎ直すと、僕は色のある男を見下ろす。しかし特に変わった様子はない。砂時計は――ん？

改めて見た砂時計。その砂は落ちるスピードを加速していた。上部に残存する寿命の砂は、ほとんど下部の砂溜りを嵩増かさしてゆく。

そして――。

全ての砂が落ちきった頃、男の様子が急変した。息苦しそうに悶え、まるで首でも吊ったのかと見紛うほどの顔面蒼白。

空気を求めるように手を伸ばし、その瞬間、膝の上に立つ僕と目が合った。

涙と涎、そして鼻水を垂れ流して身悶える男。

僕はその様子を薄ら笑いを浮かべ、男が絶命するまですっと見下ろしていた。

疑問の解決

初めて人を殺した……死神として。

もつと精神的に追い詰められたり、良心の痛みや罪悪感に苛まれるのかと思っていたが、そんなことは全然なかった。

むしろ——気持ちいい。そう、あの人間に重なるようにして存在していた発光体。あれを切り裂く時に手に感じた抵抗感。希薄な存在ながらに伝わる感触は、まさに斬ったという実感が湧くものだった。

僕は男の死を確認した後、病院から外へ出た。夜中だが少なからず人通りがあり、人々だけはやはり色付で存在している。

不思議に思いながらも、僕はとりあえず一日のノルマを達成出来た事に喜び、意気揚々と夜の街へ繰り出す。

道行く人が僕を擦り抜ける。誰も僕の存在には気づかない。少し寂しい気もするが、これはこれで滑稽だ。

すると繁華街中ほどまで歩いて来たところで、なにやら喧騒が聞こえてきた。深夜な為、人々の往来による騒々しさではない。

雰囲氣的に、喧嘩……だろうか？

僕は声の聞こえた方へと近づいていく。そこは狭い路地裏で、明かりも灯されていない陰気臭い場所だった。だが僕の目は、そんな暗さの中に存在する人間を鮮明に捉えている。白黒の世界にカラフルな人。どうやら一人の人間を五人で囲んでいるようだった。

『おら、金出せよ金』

その内の一人が、どすの利いた低い声で唸り、腹を抱えてうずく

まり咳き込む男の髪を掴み上げる。

顔を無理やり向かせられる男の口は切れ、目は腫れ上がり出血し、ヒューヒューとおかしな呼吸をしていた。

その様子をグループの中で唯一の女が、壁にもたれ掛かりタバコをふかしながら、にたにたと下品な笑みを浮かべ見物している。

……下衆どもが。

年齢からすると十代後半から二十代前半だろう。なおも続けられる不良グループによる一方的な暴力。振るわれている側の男はもう虫の息だ。

……助ける道理も義理もないが、これはさすがに放っては置けないな。

僕は殺意を持って眼窩を連中に向ける。群れる事でしか自分を誇示出来ない小さき者。他人の迷惑も考えられない外道。

再び僕の眼孔の奥が熱を持つ。するとこの場にいる全員の体に発光体が重なり移りだした。僕は全ての砂時計を確認してゆく。どうやら運命の寿命が近いものは二名しかないようだ。

女と、その隣で地面にしゃがみ、つまらなさそうな表情を浮かべ携帯を弄る金髪の少年。左耳には三連のピアス。そして唇にも開けられている。

この場にいるグループ五人全員を殺したかったが、それでは掟に逆らうことになる。僕の目的は、闇に囚われることなく、闇から開放されて死ぬことだ。

仕方がないが、二人で我慢しよう。それに、いきなり人が絶命すれば、暴力をやめて消えるかもしれない。僕はそれに賭けることにした。

まず自分から最も近い位置に立つ女に近づいていく。髪は赤茶に染め、こちらにも三連のピアスを耳に開けていた。豹柄のワンピース

にデニム地のショートパンツ。ニーソックスに黒のショートブーツといった、明らかに遊んでいそうな出で立ち。

女の発光体はこちらを向き僕に気付くと、驚愕の表情を浮かべた。だが肉体の方は品の欠片もない笑いを浮かべたままだ。

僕は一人ほくそ笑む。またあの感触が味わえるのだから、高揚しないわけがない。

手にした鎌を振り上げると、女はまるで金縛りにでもあったかのように固まった。僕は目のない眼窩で見据えたまま、緑に光る女のを一太刀のもとに切り裂いた。真つ二つになった女は鮮血を噴き上げながら絶叫を上げ、そして砂時計の消滅とともに消え去った。

肉体の方は十秒程度の間の後、胸元を押さえ前のめりに倒れこむ。周りにいる人間がそれを不思議そうな顔で見た後、笑いを上げるもの、心配そうに覗き込むもの。それぞれが別々の行動をとる中で、隣に座る男だけは携帯画面から目を逸らさずに何かに夢中になっている様子。

男の発光体——今思い出したが、昔図書館で色々調べている時に、この発光体に似た記述を神秘学の本で目にしたことがあったな……。

たしか……アストラル体。星幽体と呼ばれる、物理的肉体と重なって存在する霊的な体であり、主に精神機能を司るとされているもの。

これがそれは定かではないが、僕はこの緑の発光体をアストラル体と呼称することに決めた——。

男のアストラル体も本体と同様、僕の存在を認識していないかのように携帯に釘付けだ。

僕はゆっくりと近づいていく。目の前まで来ても、そこで腰を下ろしても、まるでシカトだ。何を見ているのか気になった僕は、男

が手に持っている携帯画面を覗きこんでみた。

すると、光量を最低まで落とした薄暗い画面に表示される携帯メモリーを、ひたすらに下へスクロールしている。それを見つめる目は虚ろだった。

薬でもやっているのか？ そんな疑問を持ちつつも、ノルマの為人助け？ の為に鎌を振り上げ、それを下ろす。

男のアストラル体は女のような悲鳴を上げることなく、血飛沫だけを上げて消えていった。

そして例の如く十秒ほどで肉体の死が訪れた。前の二人とは違うパターンに、内心不安を感じていたが、同じように死んでくれてホッと胸を撫で下ろす。

すると異変に気づいたのか、不良グループの残り三人は倒れた二人に歩み寄ると、それぞれの体を抱き起こす。そして携帯のライトを使ってその顔を照らした連中は、凄惨な最後を遂げた人間の表情を見て一瞬息を呑んだ後、気が狂ったかのように絶叫する。

『うわあああああ！！』

そしてその現場から逃げるように各々走り去っていった。

取り残された男は気を失っているのか、小さな息を漏らすだけで起き上がろうとはしない。

遅かったか？ 少し残念な気もするが、僕は肉体には触れられない為起こすことも出来ない。

こんなところにおいても仕方がない為、僕は早々に陰惨な現場から立ち去ることにした。

街中を歩く最中、死んでいるはずなのに極度の疲労を感じた僕は、一旦あの闇に帰ることに決めた。この白黒の世界は、なんだか落ち着かない。

昼になれば更に人の数は激増する。ここは都会だ。景色全てが力
ラーならいざ知らず、人々だけに彩色されている世界。都会の雑踏
を想像しただけで頭が痛くなりそうだ。

それに、もうこちらへの出方も分かったから、いつでも来れるだ
ろう。しかし、帰りはどうするのだろうか。

僕は疑問に思い、とりあえず道端の何もない空間に向かって鎌を
思いっきり振ってみた。

……………しかし目立った変化は何も起きない。

少々苛ついた僕は、自販機、電信柱、家の壁など、とりあえず目
に付くところに鎌を振ってみる。だが変化はない。

すると僕の頭脳が途端に何かを閃いた。闇……………そう、闇だ。

僕は白黒の世界で最も色濃い黒、影のあるらしき場所に近づき、
鎌を振り下ろす。案の定、そこには出てきた時のような亀裂が生じ、
闇色の煙が噴出してきた。

懐かしい暗黒の世界。僕は亀裂に手を伸ばし、家への帰還を無事
に果たすことが出来たのだ。

闇の中に身を置くことがこれほどまでに落ち着き、安らげるもの
だとは思ひもしなかった。少なくとも、死神にされた当初なら考え
も及ばなかったことだろう。

だが今は違う。覚えてはいないが、母の胎内に宿る命。そんな頃
の自分は、まさにこんな感覚だったのではないかと思う。

僕は暗闇の中で一人思量する。することがない為、当然らしい行
為だとは言えるが……………。外へ出て分かったことを整理してみること
にした。

まず人を殺める時。明らかな殺意が沸き起こらなければ、アスト

ラル体は見えないし砂時計も出現しないということ。まあその時は目の奥が熱くなる為、分かりやすいと言えば分かりやすい。

という事はだ、僕が手にするこの死神の大鎌は、普段普通に人を斬っても人は殺せない、という事になるのか？……まあ、そこら辺はまだ何とも言えない為、後日検証してみることにしよう。

そしてモノクロの世界。どうやらあちらで活動すると、体力を消耗するようだ。現にこちらに戻ってきてからは、まるで温泉にでも浸かっているかのように心地いい感覚が全身を包み込む。

つまり、僕はここで体力を回復させつつ、現世で人の命を奪わなければならぬということ。一月の間に五百人も……。死んでいるのに体力を使うなんてことは、誰にも想像がつかないだろうな。

僕は一日目で三人の命を奪った。だがこんな調子ではノルマを達成できない。あと二十九日しかないのだから。単純計算、これからは最低一日十七人は殺さなくてはならない……。

死神とは、なかなか面倒くさい仕事なんだな。

僕は闇に意識を奪われるかのように目を閉じ、そしてそのまま眠りについた――。

目を覚ました僕の目の前に広がるのは闇。混沌だ。一寸先も見えないほどの深い闇。

今日は二日目。気合を入れて殺さなければ、ノルマを終えることが出来ない。

そうして再び空間に亀裂を入れた僕は、白黒の現世へと旅立った。

出てきた場所は都内某地区西よりの場所。

思ったのだが出てくる場所は一定ではないのか？　もしかすると区間や区域ごとで分けられているのかもしれないな。

とりあえず人々のいそうな場所を探す。ここは大通りだ。深夜営業の店も多い。そこの店にでも入れば、少なからずターゲットは見つかるだろう。

右を左を見ながら歩いていると、前方から酔っ払いが歩いてくる。千鳥足でおぼつかない。ふらふらと蛇行しながらこちらへ向かってくる中年サラリーマン。

僕はひとまず先日の疑問を解消する手段として、この人間を鎌で斬ってみることにした。

両手で柄を持ち後方へ大きく振りかぶる。近寄ってきたところを見計らって勢いよく振りぬいた鋭利な刃は、男の体をするりと通り抜け——男は何事もなかったかのように通り過ぎて行った。

やっぱり。明確な殺意がないと人は殺せないんだな。それが分かっただけでもいい収穫だ。

サラリーマンに振り返ると、僕は殺意を持って男を凝視する。目の奥が熱を持ち、アストラル体と同時に砂時計が出現した。

……どうやら運命の寿命までは程遠いようだ。

僕はため息の後、目に付いた看板の居酒屋へと入り、ノルマを達成すべく殺戮を開始する。

後悔の闇

僕はノルマを達成すべく、昼夜を問わず人を殺した。

最初の内は昼間の雑踏に慣れず、酷い頭痛に悩まされたりもしたけれど、そんなことを言っていてはいつまで経っても終わらない。

それに、僕は……闇に囚われるのが怖かったのかもしれない。闇は死神となった僕にとって落ち着く場所ではある。

だがあの凍えるような冷えを思い出すたび、僕の全身に悪寒が走るのだ。あのままノルマを達成出来ずにいたら、きつとあの極寒を体感しながら永遠に闇に葬られるんだ、意識を伴ったまま。

僕は一日十七人というノルマを欠かさずに行ってきた。何度も聞いた悲鳴、断末魔の絶叫。絶望し恐怖に歪んだ顔。見慣れた死に顔……。

僕はいつからこんなにも残忍な性格になったのだろうか。生きていた時には考えられないほど、僕の心は悪に染まり、蝕まれ、拳句食い尽くされている。

……いや、人間誰しもが内包する心の闇が肥大し膨張しただけなのかもしれない。

いつからか思っていたことだ。世の中腐ってる。真面目な人間が馬鹿を見る。人を殺した人間が、たかが数年の服役で再び太陽の下へ当たり前のように出てくる。

犯罪は減らない。戦争も紛争も差別も……。

僕はこう思うんだ。人が人である限り、決して悪は無くならない

んだと。戦争も差別も、犯罪も。

それは誰もが心に巢食わせている、負の感情が励起することによって引き起こされるものだ。

完全なる善、光に愛された正義は、この世には存在しない。

それを装うこと、正しく読んで字の如く、偽善だ。似非の正義が蔓延する世の中など、消えて無くなればいいとずっと思っていた。

僕が今まで殺してきた人間は、その殆どが罪人だ。収監されている人間、一方的な暴力を振るう人間……。ニュースで見たことのある殺人犯で、運命の寿命が近い者はみんな迷わず殺した。

運命の寿命が近い善者（に見える者）もノルマのために殺してきたが……。基本は罪人というスタンスに則る。

そうして四百九十九人殺してきた僕が、最終日。最後に闇から抜け出てきた場所……。それは、僕自身が通っていた大学だった。

今まで、まるで避けているかのようにエリアを外していた亀裂は、最後、よりにもよって通い慣れた学び舎を選択したのには何か意味があるのだろうか……。

僕は見慣れたキャンパスを見渡した。丁寧に刈り込まれた芝生を切り出すかのように舗装された道。植木や花壇が目には優しい緑溢れる色彩の庭。

茶色いレンガ調の校舎は四階建てで、見える景色は白黒でも、当時通っていた頃の色が、今でも鮮明に思い描ける。

懐かしさを胸に僕は校舎へと続く道を歩く。すれ違ったり、所々にいる学生たちの顔には、見知った者もちらほらと……。

——えっ！？

すると広い大学の校庭を見渡す僕の眼窩が、設置されたベンチに座る、もう触れることすら叶わなくなった彼女……。美月の姿を捉え

た。

僕は楽しそうな雰囲気を醸し出す美月へ近づいていく。嬉しさと死んでしまった申し訳なさから、足が震えているのが自分でも分かる。

しかし喜びを感じたのも束の間。美月の隣に腰掛ける男を見た瞬間、僕は激しい嫉妬心に駆られた。

……あいつはたしか……美月に何度も交際を迫っていた男だ。学部は……そう、記憶違いでなければ法学部だった気がする。

しつこく言い寄られている現場を、友達から見た事があると聞いたことがあった。美月は断ったと言っていたが……。まだ諦めていなかったのか。

僕は二人のすぐ傍まで近寄ると、会話に耳を傾ける。盗み聞きみたいで後ろめたい気もするが……。

そんな僕の思いも余所に、二人から聞こえた会話はまるで期待を裏切るものだった。

『今度どこ行く？』

『楽しければどこでも』

二人の笑い声が僕の耳に木霊する。

僕に向けていた時のような優しい笑顔……声。それが今は違う男に向けられている。

最期、泣いていた声は、今も僕の耳に残ってる。悲しんでくれたんだと、僕はとても嬉しかった……なのに！

聞こえてくる会話は、まるで好き合い付き合う恋人のよう……。

僕の心に醜い嫉妬、憎悪、敵意と殺意など、ありとあらゆる負の感情が芽生え根を下ろす。

自然と目の奥が熱くなり、二人のアストラル体と砂時計を映し出した。

二人は話に夢中で僕の存在に気づかない。僕は砂時計を確認し、それぞれの運命の寿命を読み解く。男はまだ駄目なようだった。砂は半分以上も残っており、掟に逆らうことになる。

そうして美月へ視線を移したその時、ちょうど美月のアストラル体と目が合った。驚愕の表情を浮かべる美月に気づいた男のアストラル体もまた、愕然とし驚愕の表情を浮かべる。

僕は口から冷気を吐き出し、美月の胸元の砂時計を二つ見比べた。

……美月は……殺せるようだ。

実際の砂時計にすると残り十秒もないだろう。放っておいてもその内事故か何かでこの世を去る。

………なら、いつそ僕の手で殺してしまうのもありかもしれない……。

僕の心は……人の幸せを願えないほどに黒ずみ、壊れてしまったように――。

愛した女性を傷つけ壊す。その事に罪悪感など、今の僕には微塵も感じられない。

幸せを、その笑顔を。僕は今から奪うんだ……。

そのことが嬉しい。死神としてのノルマ……これで達成される……

……。そう、最後は君だよ………美月！

僕は冷視で見つめた美月に向かって、鎌を大きく振り上げた。そしてそれを思いきり振り下ろす。すると――。

僅かな一瞬、男のアストラル体は美月を庇う様に覆い被さり、死神の鎌は二人を一気に切り裂いた。

二人の断末魔の叫びが入り混じり、僕の耳に木霊する。

……不快だ……。まるで不協和音のような音……。聞くに堪えない声。

僕は刹那はつとした。……寿命の近くない者を殺してしまった……。

鎌の柄をとる僕の手が震える。……僕はこれからどうなる？ 掟を破ったことになるのか？ だが、五百人は達成できたんだ。クリアしたんだ。大丈夫だと思う……。のだが。

僕は窒息死したような、もがき苦しんだ二人の遺体を見た。すると周りにいた人間も異変に気づいたようで、死体を見た一人が悲鳴を上げると、まるで呼応する遠吠えのように、キャンパスは恐怖を孕んだ阿鼻叫喚の渦と化する。

自分は何も悪くない。ノルマのためにやったんだ。

僕は二人を見下ろしながらゆっくりと目を閉じた――。

再び目を開け気づいた時、僕は闇の中にいた。

そこには、初めて来た時と同様、死神の頭蓋骨だけが仮面のように黒い空間に浮いている。

僕はその何もない眼孔を真っ直ぐに見返し、その言葉を待った。

『やつちまったな』

聞こえた声は残念そうな嘆息だった。

何がだ……？ 僕はノルマを達成したはずだ。だから本当の死へ

。

『お前、掟の四番まで破っちまったのか』

掟の……四番？ ……確か聞き取れなかった部分だ。

『四つ、“愛した者を決して殺してはならない”』

……愛した、者……？

ちよつと待て！ そんなことを今更言われても知らない！！ ち
ゃんと五百人殺したじゃないか……僕を……解放してくれ――。

『残念だなあ。お前は掟を破った。またノルマを一からやり直した
後、その後然るべき場所へと送られる』

然るべき……？ ノルマを一から……？ 冗談じゃない！ また
一ヶ月以内に五百人も殺さなくてはいけないのか！？ あの声はも
う聞きたくないんだ、どうにかしてくれ……。

『今回は倍数の千だ……まあ精々頑張るな』

……千、人。

『掟は一日に最低一人の制限以外は今まで通りだ。一日必ず殺さな
くてよくなったからって、また破るなよ？ 破ったら五百ずつ増え
ていくからな。ああ、それと、お前が闇から解放されることは……』

もうない。諦めるんだな』

……開放されることはない。髑髏の言葉は僕を絶望させた。言葉を失った僕を嘲笑うかのように、髑髏は歯を打ち鳴らしながら闇へと消えていく。

これは夢ではない。僕は鎌を携えている。黒衣を纏い、闇の一点を見つめている。

胸の奥から込み上げてくるのは絶望への悲しみと後悔。

なぜ僕はあの時勢いのままに美月を殺してしまったんだろう……。他に人間は沢山いたのに。

醜い感情のまま、冷静さを欠き、熱の衝動に駆られ殺してしまった結果がこれだ……。悔やんでも悔やみきれない。

僕は声をあげて泣いた。流れるはずもない涙が頬を伝う感覚がある。

激しい慟哭が寂寞とした闇の中、どこまでもどこまでも響いていく――。

『心にあるのなら……僕の心は黒いだろう。限りなく黒に近く、闇色を纏った黒』

然るべき場所がどこなのかは分からない。きっとここみたいに何も無い、何も聞こえない空間だろう。

もう、死という名の安寧は訪れない。訪れなくなってしまった……。

だが僕は殺さなければならぬ。ノルマの先に、今よりもマシな

安らぎがあると信じ——狂気に彩られた鎌を振るって……。

後悔の闇（後書き）

『死神の懺悔』をお読みいただき、ありがとうございました！

今作は後悔がテーマになっているお話です。相変わらず下手でチープで拙い文ですが……。

この作品は題名だけが最初思い浮かび、そして死神は人を殺めて後悔はないんだろうか？ という疑問が発生し、勢いで書いたものでして……。

あまり深く考えず、閃きのままに書きました。結果、これです。残念な感はありませんが……やりきったつもり……です？

こんな拙作を読んでくださった皆さま、本当にありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3209t/>

死神の懺悔

2011年11月15日05時49分発行